1. 人文学部・人文科学研究科

Ⅰ　人文学部・人文科学研究科の研究目的と特徴　・・　１－２
Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定　・・・・・・・・・・・　１－４
　　分析項目Ⅰ　　研究活動の状況　・・・・・・・・　１－４
　　分析項目Ⅱ　　研究成果の状況　・・・・・・・・　１－17
Ⅲ　「質の向上度」の分析　・・・・・・・・・・・・・・　１－19

Ⅰ　人文学部・人文科学研究科の研究目的と特徴

1　人文学部・人文科学研究科の基本的な目標等

富山大学の理念，研究目標，中期目標の基本的目標は，表A，B，Cに示す通りである。

表A　富山大学の理念

富山大学は，地域と世界に向かって開かれた大学として，生命科学，自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い，人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し，地域と国際社会に貢献するとともに，科学，芸術文化，人間社会と自然環境との調和的発展に寄与する。

（出典：富山大学概要）

表B　富山大学の目標　Ⅱ研究

富山大学は，学問の継承発展と基礎的な研究を重視するとともに，現代社会の諸問題に積極的に取り組み，融合領域の研究を推進することにより，「地域と世界に向けて先端的研究情報を発信する総合大学」を目指す。 １．真理を追究する基礎研究を尊び，学問の継承発展に努めるとともに，応用的な研究を推進する。 ２．先端的な研究環境を整備し，世界的な教育研究の拠点を構築する。 ３．世界水準のプロジェクト研究を推進するとともに，自由な発想に基づく萌芽的な研究を積極的に発掘し，その展開を支援する。 ４．地域の特徴を活かした研究を推進し，その成果を地域社会と国際社会の発展に還元する。

（出典：富山大学概要）

表C　富山大学中期目標における基本的な目標

富山大学が全学的に重視する目標は，教養教育と専門教育の充実を通じて，幅広い職業人並びに国際的にも通用する高度な専門職業人を養成することである。本学の特色は知の東西融合を目指すことにあり，この点を生かしつつ，地域と世界の発展に寄与する先端的な研究を推進する。そして，東アジア地域をはじめ諸外国の教育研究機関と連携しつつ，国際的な教育・研究拠点となることを目指す。また，地域と時代の課題に積極的に取り組み，社会の要請に応える人材を養成し，産学官の連携と地域への生涯学習機会の提供などを通じて，地域社会への貢献を行っていく。

（出典：富山大学中期目標）

人文学部（以下，「本学部」と略記）の研究の基本方針は，表Dに示す通りである。

表D　本学部の研究の基本方針

（１）東アジア研究の推進

日本海を取り巻く東アジアのほぼ中心に位置するという本学の立地条件を生かし，日本，中国，朝鮮半島，ロシアといった東アジアの諸文化の特質と諸文化間の交流・影響関係に関する研究を，国際的な学術交流を視野に入れつつ，文学，言語学，歴史学，考古学，哲学・思想，国際関係論などの多様な切り口から総合的かつ組織的に推進する。

（２）人文科学の基礎研究の充実

社会の動静を客観的にとらえ，長期的な視野から人文科学の基礎的諸研究を維持・発展させることは，人文系研究機関に課せられた本来的に重要な責務であるという認識に立って，幅広く人文科学の基礎研究を着実に推進する。

（３）現代社会の諸問題への取り組みと社会貢献

グローバル化，高度情報化により複雑化する現代社会の諸問題を，社会学，人文地理学，文化人類学などの角度から分析し，当該学問分野の発展に資するとともに，地域社会の課題解決，地域文化の発展に貢献する。

（参考資料：ミッションの再定義）

２　本学部・大学院の特徴と研究の基本方針

本学部は，昭和24年，旧制富山高等学校の一部を母胎に，幅広い教養と専門的知識をもつ人材の育成をめざし，富山大学文理学部文学科として創設された。文理学部文学科は，当初，旧制高校から継承した哲学・史学・国文学・英文学・ドイツ文学から構成されていたが，昭和52年，人文学部として分離独立した。学際性と総合性，さらには富山県という地域性を重視する観点から，この改組に際して，ロシア語・ロシア文学，朝鮮語・朝鮮文学，考古学，人文地理学など，全国的にも希少な専門分野が新設された。

昭和55年には２学科16コースに組織されたが,学部の多くの教員が参画する特定研究「東アジア地域の形成と展開に関する共同研究」が進められるなど，東アジア重視の研究方針が定められ，今日まで発展的に継承されてきた。

平成５年には教養部の廃止にともなう学部再編が行なわれた。学部の講座組織はその後，小講座から大講座への改変を基本的方向とし，平成17年度に再度，改組され，１学科７講座９コースの教育体制となった。現在の研究環境は，複合的な研究領域を相互の親和性に基づき編成した大講座制により，各研究分野の枠組みを超えた共同研究の促進を可能にする体制を特徴としている。

大学院人文科学研究科は，高度の専門知識と広い学際的視野をそなえた人材育成を目的に昭和61年に設置され，日本・東洋文化専攻と西洋文化専攻から組織された。平成９年には改組が行われ，文化構造研究専攻と地域文化研究専攻とに再編された。その後，平成23年に諸教育研究分野間の連携を強化するため，従来の２専攻から人文科学１専攻に統合され，思想・歴史文化領域，行動社会文化領域，言語文化領域の３つを下位領域として，現在に至っている。

[想定する関係者とその期待]

①　東アジア研究等の先進的研究機関としての役割

人文科学諸分野の国内外の学界から，東アジア研究をはじめとする先進的な研究成果，関連学問分野への貢献，若手育成，学会・シンポジウムを通じた研究交流を期待されている。

②　地域のシンク･タンクとしての役割

本学部は，国・地方自治体・地域社会とも積極的に連携しており，東アジア研究ならびに現代社会の諸問題研究の現場においてシンク・タンクの役割を果たし，地域社会への助言などの社会貢献をすることが期待されている。

Ⅱ　「研究の水準」の分析・判断

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

観点　研究活動の状況

（観点にかかる状況）

（１）研究業績

第２期は，第１期と比べ，研究業績の増加と東アジア研究の重点化が顕著である。本学部教員数は，第１期，年平均 70 人に対し，第２期は 64 人と減少したが，教員一人あたりの単著論文・著書は第１期より約 1.4 倍，共著論文・著書，書評・翻訳等は約 2.1 倍の増となった（資料１－１－１）。第２期における教員業績評価制度の導入が一定の効果を上げたと考えられる。また，第２期の研究内容は，第１期の人文基礎研究から東アジア研究へと重点が移行し，学部の基本方針に沿った研究の進展が見られた（資料１－１－２）。

資料１－１－１　年度別研究業績数

期 間	第１期	第２期					
年 度	16-21 年度（年度平均）	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度
教員数	70 人	66 人	66 人	63 人	64 人	65 人	62 人
単著論文・著書	64	81 (1.4)	82 (1.4)	75 (1.3)	70 (1.2)	81 (1.4)	85 (1.5)
共著論文・著書	9	18 (2.2)	17 (2.1)	15 (1.9)	22 (2.8)	8 (1.0)	21 (2.8)
書評・翻訳等	14	20 (1.5)	22 (1.7)	17 (1.4)	21 (1.7)	29 (2.3)	26 (2.1)
合 計	94	119 (1.4)	121 (1.4)	107 (1.3)	113 (1.3)	118 (1.4)	132 (1.6)

＊ 本学部教員が第２期に発表した論文・著書等の業績数を，比較のために第１期の１年当たりの平均業績数（左端）とともに示した。

** カッコ内は第１期の教員１人当たりの単年度業績数の平均を１とした時の値。

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

資料１－１－２　研究業績の内容

期 間	第１期	第２期
東アジア研究	34%	56%
人文基礎研究	57%	24%
その他	12%*	20%

＊　東アジア研究との重複あり。

** 分析対象は資料１-１-１の合計業績とした。

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

（２）学会発表

発表数も，第１期に比べ増加した。特に 25 年度以降の増加が顕著で，第１期の教員１人当たりの発表数の 1.5 倍以上となった。国際学会での発表数は，第１期では全体の 22%であったが，25 年度以降は平均 29%となっており，国際的連携の着実な進展が伺える（資料１－１－３，１－１－４）。

資料１－１－３　年度別学会発表数

期　間	第１期	第２期					
年　度	16-21 年度（年度平均）	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度
教員数	70 人	66 人	66 人	63 人	64 人	65 人	62 人
学会発表	40	41 (1.1)	41 (1.1)	43 (1.2)	56 (1.5)	61 (1.6)	61 (1.7)
うち，国際学会発表	9 22%	3 7%	7 17%	10 23%	19 34%	17 28%	17 28%

＊ 本学部教員が第２期におこなった学会発表数を，比較のために第１期の１年当たりの平均発表数（左端）とともに示した（カッコ内は資料１－１－１に同じ）。
＊＊ 下線部の数値は，学会発表のうち国際学会が占める割合（%）。

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

資料１－１－４　本学部教員の国際学会発表リスト（平成 26 年度の一例）

タイトル	学会名	開催地	年月日
Illusion comme phénoménalisation et horizon anthropologique	Workshop international: "La pensée de Marc Richir", le 1er avril 2014, Faculté d'humanités de l'Université de Coimbra	コインブラ大学（ポルトガル）	平成 26 年 4 月 1 日
Children's life space changes over three generations in Japan through time-geography approach	The 19th IPA world conference 2014 Istanbul	Istanbul Technical University Taskila Campus（トルコ）	平成 26 年 5 月 20-23 日
Operating repository-based online journal as a way of social contribution of universities: The first year accomplishment of JIRCL.	31st Hotel & Tourism Conference of the Academy of Korea Hospitality and Tourism	Yongsan University（韓国）	平成 26 年 5 月 10 日
Commentator of the presentation of Choi SeungHo's 'A study on the special and universal of CSR management in hotel company'.	31st Hotel & Tourism Conference of the Academy of Korea Hospitality and Tourism	Yongsan University（韓国）	平成 26 年 5 月 10 日
The social environment and the language:A comparative research on the Syogawa River Basin and the Jinzugawa River	PICAG-2 Papers from the 2nd International Conference on Asian Geolinguistics	チュラロンコン大学(タイ)	平成 26 年 5 月 24 日
A Study of Sŏktok Kugyŏl materials reading based on Ŏnhae materials	2nd Korean International Symposium of the Department of Asian and African Studies, Faculty of Arts, University of Ljubliana, 'Understanding Chinese Characters and Cultures in East Asia	リュブリャナ大学（スロベニア）	平成 26 年 6 月 27-28 日
The ripple effect of servant leadership on relationship-building and information-sharing among team members	28th International Congress of Applied Psychology	Paris Convention Centre（フランス）	平成 26 年 7 月 8 日

敬語行動の地域差とその変容	日本語教育国際研究大会	シドニー工科大学(オーストラリア)	平成26年7月11日
Choice factors in the case marking for underlying object in the Koryak S=A alternation	Syntax of the World's Languages VI	University of Pavia(イタリア)	平成26年9月9日
Electrophysiological measures reveal similar capacity limits for both present and absent information.	7th World Congress of Psychophysiology	International Conference Center, Hiroshima（日本）	平成26年9月24日
Relationship between emotional reactivity to emotional visual stimuli and dream properties during sleep.	7th World Congress of Psychophysiology	International Conference Center, Hiroshima（日本）	平成26年9月25日
韓国近代文学と食文化－登場人物の食事（朝鮮語）	世界記録遺産と韓国文化－韓国文化と味覚的想像力	慶北大学校嶺南文化研究院（韓国）	平成26年10月13日
Réflexions leibniziennes sur la nature des quantités imaginaires : Leibniz critique de l'algèbre cartésienne	Descartes et ses contemporains	大阪国際会議場(グランキューブ大阪)（日本）	平成26年10月13日
清朝宮廷戯劇文化的研究	清代戯曲与宮廷文化学術討論会	中国人民大学(中国)	平成26年11月3日
試論《詩経》景物描写之演変	第11届詩経国際学術研討会	河北師範大学(中国)	平成26年11月8月4日
日本大正昭和初期的漢学家,中国研究専家及社会評論家眼中的《儒林外史》	2014年中国･全椒呉敬梓逝世260周年国際学術研究討論会	全椒儒林外史国際大酒店(中国)	平成26年11月6日
Crime prevention activities for children's safety environment in a school district: A case study in Uozu city, Japan	4th International conference Geographies of children, youth and families	The Wyndham Bayside Hotel(USA)	平成27年1月12-15日

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

（３）シンポジウム・講演会・学会等の開催

第２期のシンポジウム等の開催は，第１期よりも質・量ともに顕著に向上した。平成21年度，学部予算に「シンポジウム等開催支援経費」を設けて組織的な支援体制を整備したことにより，シンポジウム等は，従来，研究者が個別に行ってきたものから，学部の重点的課題を系統的に追求するものへと質的に転換した。

具体的には，日本（資料１－１－５・整理番号 *5, 7, 8, 13, 17, 18, 22, 24, 43*），中国（*3, 10, 11, 19, 20, 23, 28, 29, 39*），韓国･朝鮮（*6, 12*），ロシア（*16, 34*），東アジア全般（*4, 15, 27, 30, 35, 37*）など，第１期の「日本海総合研究プロジェクト」を発展的に継承した東アジア総合研究関連が重点的に開催され（28件），「日本海総合研究プロジェクト」が平成13～21年度で開催したシンポジウム（８件）に比べ，大幅な増加となった。

また，当初，学部の支援経費で開催されたラフカディオ・ハーン関連のシンポジウム等はその成果が高く評価され，学長裁量経費による全学的プロジェクトへと発展した（*21, 33, 40, 41*）。以上の成果は，「人文学部東アジア研究シリーズ」の第１号として，平成27年度に冊子として公刊された。

資料１－１－５　人文学部・人文学科で開催されたシンポジウム・講演会

年度	整理番号	シンポジウム等の名称	開催日	開催場所	参加者数（概数を含む）
H22	1	地域の課題に応じたスクールカウンセリングの専門性に関するシンポジウム	平成22年4月10日	人文学部	40名
	2	国際シンポジウム・文学における国際交流　―異文化理解の検証と普及―	平成22年10月21日	人文学部	50名
	3	シンポジウム「中国古代の楚文化と中原文化」	平成22年12月1日	人文学部	50名
	4	富山大学人文学部第1回言語学公開講演会	平成22年12月10日	人文学部	75名
	5	講演・シンポジウム「移動する子どもたちの「今」と課題：ブラジル⇔日本」	平成22年12月19日	人文学部	40名
	6	シンポジウム「20世紀初頭朝鮮における大衆小説研究の可能性」	平成22年12月21日～24日	人文学部，中央図書館	15名
	7	シンポジウム「ふるさと文学を語る」	平成23年3月19日	人文学部	36名
H23	8	平成23年度日本語学・日本語教育学公開講演会	平成23年6月4日	人文学部	40名
	9	シンポジウム「まちなか研究室を起爆剤にした学生によるまちづくり」	平成23年11月26日	フォルツア総曲輪シネマホール	70名
	10	公開シンポジウム「中華圏におけるモダニズム」	平成23年12月3日～4日	人文学部	27名
	11	国際公開シンポジウム「近世中国の刑事政策と社会問題」	平成23年12月10日	人文学部	18名
	12	シンポジウム「20世紀初頭朝鮮大衆小説の朝鮮語学的検討」	平成23年12月20日～21日	中央図書館	15名
	13	シンポジウム「ふるさと文学」	平成24年3月26日	人文学部	60名
	14	G.Potashenko氏（リトアニア・ビリニュス大学）講演会	平成24年3月27日	人文学部	15名
H24	15	富山大学人文学部第2回言語学公開講演会	平成24年5月11日	人文学部	70名
	16	北海道立北方民族博物館開館20周年記念巡回企画展「北にくらす子どもたち」（主催は人文学部）	平成24年7月2日～26日	中央図書館	見学者数不明
	17	NINJALセミナー「漢文訓読再発見」	平成24年7月27日	理学部多目的ホール	50名
	18	シンポジウム「知の東西融合―異文化理解の検証と普及―」	平成24年10月25日	人文学部	40名
	19	国際共同シンポジウム「華人世界の拡大と天下意識」	平成24年11月17日	人文学部	39名

	20	学術シンポジウム「前近代中国の司法制度」	平成 24 年 12 月 1 日	人文学部	16 名
	21	シンポジウム「小泉八雲の新しい地平：最近のラフカディオ・ハーン研究をめぐって」	平成 24 年 12 月 15 日	人文学部	116 名
H25	22	シンポジウム「女性作家の『労働』表現−地域からの発信−」	平成 25 年 11 月 28 日	人文学部	40 名
	23	シンポジウム「近世中国の刑法と司法制度」	平成 25 年 11 月 30 日	人文学部	23 名
	24	シンポジウム「世界の中の日本語・世界の中の日本−親日の形成と言語−」	平成 25 年 12 月 8 日	人文学部	120 名
	25	国際シンポジウム「フランスにおける日本学，日本におけるフランス学」	平成 26 年 2 月 27 日	人文学部	28 名
H26	26	国際シンポジウム「ことばは音楽とどう関わるのか」	平成 26 年 7 月 5 日	人文学部	100 名
	27	富山大学人文学部第 3 回言語学公開講演会	平成 26 年 8 月 1 日	人文学部	65 名
	28	シンポジウム「明代中国と日本−政治と法制−」	平成 26 年 11 月 29 日	人文学部	25 名
	29	シンポジウム「中華圏におけるモダニズムⅡ：近代中国の都市リゾート」	平成 26 年 12 月 6 日～7 日	人文学部	27 名
	30	国際シンポジウム「東南アジアにおける教育拠点の形成と人文学的『知』の応用」	平成 26 年 12 月 7 日	人文学部	115 名
	31	国際シンポジウム「私たちはフランス文明から何を学んだか」	平成 26 年 12 月 20 日	人文学部	36 名
	32	シンポジウム「ドイツ語教育のためのドイツ語研究」	平成 27 年 2 月 21 日	人文学部	22 名
H27	33	アラン・ケラ＝ヴィレジェ講演会「ピエール・ロチとラフカディオ・ハーン」	平成 27 年 5 月 6 日	人文学部	34 名
	34	国際シンポジウム「ロシア古儀式派のイコン」	平成 27 年 6 月 1 日	人文学部	14 名
	35	富山大学人文学部第 4 回言語学公開講演会	平成 27 年 8 月 25 日	人文学部	70 名
	36	富山大学人文学部学術講演会「泣く女たちを巡って―ボードレール，谷崎，そして芸術」	平成 27 年 10 月 29 日	人文学部	30 名
	37	東アジア言語地理学国際シンポジウム（富山大会）	平成 27 年 11 月 7 日～8 日	人文学部	135 名
	38	こども環境学セミナー「若者の社会参画とまちづくり」	平成 27 年 11 月 21 日	富山市民プラザ	40 名
	39	シンポジウム「分裂する中国−二つの南北朝−」	平成 27 年 11 月 28 日	人文学部	25 名
	40	池田雅之氏講演会「小泉八雲と夏目漱石の「大きな旅」―祈りと再生の場を求めて」	平成 27 年 12 月 19 日	人文学部	70 名
	41	富山大学ヘルン（小泉八雲）研究会主催・第1回国際シンポジウム「ラフカディオ・ハーン研究への新たな視点」	平成 28 年 2 月 13 日～14 日	人文学部	140 名

	42	富山国際シンポジウム「初期近代ヨーロッパの哲学とインテレクチュアル・ヒストリー」	平成 28 年 2 月 13 日～14 日	人文学部	40 名
	43	国際シンポジウム「日本語・日本語教育研究のグローバルな担い手たち-帰国した留学生たちの今-」	平成 28 年 2 月 14 日	人文学部	60 名

（出典：人文学部総務課にて調査）

なお，これらのうち，著名な外国人研究者を招聘した国際シンポジウム・講演会は，年平均約 3.2 件開催された（資料１－１－６）。

資料１－１－６　海外の著名研究者の講演・発表状況

年度	整理番号	講演者氏名	形態
H22	2	長島要一（日本文学）デンマーク・コペンハーゲン大学	基調講演
H23	8	クック治子（日本語談話分析）米国・ハワイ大学マノア校	講演
	11	陳弱水（東洋史学）台湾・台湾大学	講評
	14	Ｇ．ポタシェンコ（リトアニア史）リトアニア・ビリニュス大学	講演
H24	17	ジョン・ホイットマン（言語学）米国・コーネル大学	講演
	17	朴鎭浩（韓国語学）韓国・ソウル大学校	パネリスト
	19	華立（東洋史学）大阪経済法科大学	基調講演
H25	23	華立（東洋史学）大阪経済法科大学	基調講演
	24	ダニエル・ロング（社会言語学）首都大学東京	研究報告
	24	張守祥（日本語教育学）中国・佳木斯大学	研究報告
	25	ジャン・バザンテ（日本学）仏国・オルレアン大学	基調講演
H26	26	牧野成一（言語学）米国・プリンストン大学	基調講演
	30	ダニエル・ロング（社会言語学）首都大学東京	研究報告
	31	大野＝デコンブ・泰子（比較文学）仏国・オルレアン大学	基調講演
H27	33	アラン・ケラ＝ヴィレジェ（西洋史）リセ・ヴィクトル・ユゴー	講演
	34	エレーナ・ユヒメンコ（ロシア史）ロシア・国立歴史博物館	講演
	36	ビアッジョ・ダンジェロ（比較文学）ブラジル・ブラジリア大学	講演
	37	李相揆（韓国語学）韓国・慶北大学	講演
	37	薫忠司（中国語学）台湾・新竹教育大学	講演
	37	鄭曉峯（言語学）台湾・中央大学	講演
	37	李仲民（中国語学）台湾・文化大学	講演
	37	洪惟仁（言語学）台湾・台中教育大学	講演
	41	オード・デュリエル（文学）（オルレアン大学）	講演
	42	リチャード・アーサー（哲学）カナダ・マックマスター大学	講演
	43	モルチャノワ・リリア（日本語教育学）ロシア・元リャザン国立大学，コルクサ・アリ・アイジャン（日本語教育学）トルコ・ネヴィシェヒル大学	研究報告

（出典：人文学部総務課にて調査）

全国規模の学会をはじめ，研究会・ワークショップ等も定期的に開催された（資料１－１－７）。

資料１－１－７　学会・研究会等一覧

年度	シンポジウム等の名称	開催日	開催場所	参加者数（概数を含む）
H22	学校臨床事例検討会	平成22年5月～平成23年2月（10回）	人文学部	20名／回
	富山地学会平成22年度総会・第1回研究発表会	平成22年7月3日	人文学部	40名
	学校臨床心理学実践に関する研究発表会	平成23年3月13日	人文学部	50名
H23	内陸アジア史学会大会	平成23年11月12日	人文学部	50名
	科研費「海峡植民地の発展と商業ネットワーク」主催書評会	平成23年11月26日	人文学部	20名
	「20世紀初頭朝鮮大衆小説の朝鮮語学的検討」	H23年12月20日～21日	中央図書館	15名
	第1回ラフカディオ・ハーン研究会	平成24年1月25日	人文学部	30名
	清朝宮廷演劇文化の研究に関する公開研究会	平成24年2月4日	人文学部	25名
	第2回ラフカディオ・ハーン研究会	平成24年2月29日	人文学部	30名
	第3回ラフカディオ・ハーン研究会	平成24年3月26日	人文学部	30名
	2012年度日本語教育学会研究集会第3回北陸地区（富山）	平成24年6月23日	黒田講堂	93名
H24	北陸都市史学会富山大会	平成24年8月5日	人文学部	50名
	日本方言研究会研究発表会	平成24年11月2日	黒田講堂	200名
	日本語学会2012年度秋季大会	平成24年11月3日～4日	黒田講堂	800名
	日本近代語研究会	平成24年11月3日	理学部	150名
H25	国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」研究発表会	平成25年11月9日	人文学部	30名
H26	ワークショップ「日韓近現代文学における戯曲」	平成26年8月25日	人文学部	15名
	日本ライプニッツ協会第6回大会	平成26年11月15日～16日	人文学部	50名
	日本アメリカ文学会中部支部例会	平成27年2月15日	人文学部	25名
H27	日本西洋史学会2015年度大会	平成27年5月16日～17日	富山国際会議場＆富山大学共通教育棟	600名
	中部哲学会（大会・総会）	平成27年9月26日～27日	人間発達科学部	35名

（出典：人文学部総務課にて調査）

（４）学外委員・審査員等

学会関係の各種役員・委員，地域諸機関における各種委員，その他の審査員等の役職も多岐にわたった（資料１－１－８，１－１－９，１－１－10)。学外との学術的な連携体制が十分に取られたとともに，とりわけ，考古学，日本史，人文地理学などの分野で，地域貢献が活発に行なわれた。

資料１－１－８　年度別学会関係委員就任状況

年度	種 類	名　　称
H22	役員・評議員等	日本言語学会，日本アメリカ文学会中部支部，日本英文学会，日本英文学会中部支部，日本ソール・ベロー協会，木簡学会，古代学協会，日本文芸研究会，富山大学国語教育学会，日本考古学協会，考古学研究会，富山考古学会，日本地理教育学会，日本語教育学会研究集会，日本ロシア文学会，内陸アジア史学会(16 件)
	編集委員	日本地理教育学会，中国社会科学院文学研究所中国古代研究中心『中国古代研究』編集委員会，続日本紀研究会，『北方言語研究』，日本独文学会北陸支部，越中史壇会(6 件)
H23	役員・評議員等	日本言語学会，日本アメリカ文学会中部支部，日本英文学会，日本英文学会中部支部，日本ソール・ベロー協会，木簡学会，古代学協会，日本文芸研究会，富山大学国語教育学会，日本考古学協会・埋蔵文化財保護対策委員(富山県)，考古学研究会，富山考古学会，日本地理教育学会，日本語教育学会研究集会委員会，日本ロシア文学会，内陸アジア史学会(16 件)
	編集委員	日本地理教育学会，続日本紀研究会，International Research in Geographical and Environmental Education，日本独文学会北陸支部，中国社会科学院文学研究所中国古代研究中心『中国古代研究』,『北方言語研究』，越中史壇会(7 件)
H24	役員・評議員等	日本言語学会，日本アメリカ文学会中部支部，日本英文学会，日本英文学会中部支部，日本ソール・ベロー協会，木簡学会，古代学協会，日本文芸研究会，富山大学国語教育学会，日本考古学協会・埋蔵文化財保護対策委員(富山県)，考古学研究会，富山考古学会，日本地理教育学会，日本語教育学会研究集会委員会，日本ロシア文学会，2013 年京都国際地理学会議コミッション委員会，関西アメリカ史研究会，中世哲学会，内陸アジア史学会(19 件)
	編集委員	日本地理教育学会，続日本紀研究会，International Research in Geographical and Environmental Education，日本独文学会北陸支部，中国社会科学院文学研究所中国古代研究中心『中国古代研究』,『北方言語研究』，日本社会学理論学会(7 件)
H25	役員・評議員等	日本言語学会，日本アメリカ文学会中部支部，日本英文学会，日本英文学会中部支部，日本ソール・ベロー協会，木簡学会，古代学協会，日本文芸研究会，富山大学国語教育学会，日本考古学協会・埋蔵文化財保護対策委員(富山県)，考古学研究会，富山考古学会，日本地理教育学会，日本語教育学会研究集会委員会，日本ロシア文学会，2013 年京都国際地理学会議コミッション委員会，関西アメリカ史研究会，中世哲学会評議員，日本中央アジア学会，内陸アジア史学会，International Congress of Psychology（2016）・プログラム準備委員(21 件)
	編集委員	日本地理教育学会，続日本紀研究会，International Research in Geographical and Environmental Education，中国社会科学院文学研究所中国古代研究中心『中国古代研究』,『北方言語研究』，日本社会学理論学会，こども環境学会，越中史壇会(8 件)

H26	役員・評議員等	日本言語学会，日本アメリカ文学会中部支部，日本英文学会，日本英文学会中部支部，日本ソール・ベロー協会，木簡学会，古代学協会，日本文芸研究会，富山大学国語教育学会，日本考古学協会・埋蔵文化財保護対策委員(富山県)，考古学研究会，富山考古学会，日本地理教育学会，日本語教育学会研究集会委員会，日本ロシア文学会，2013 年京都国際地理学会議コミッション委員会，関西アメリカ史研究会，中世哲学会評議員，内陸アジア史学会，日本中央アジア学会，International Congress of Psychology（2016）・プログラム準備委員，日本学術会議地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同地理教育分科会地図／GIS 小委員会，人文地理学会，日本地理学会 2014 年度秋季学術大会実行委員会，日本アメリカ史学会・幹事会（関西），アメリカ学会(26 件)
	編集委員	日本地理教育学会，日本地理学会，続日本紀研究会，International Research in Geographical and Environmental Education，中国社会科学院文学研究所中国古代研究中心『中国古代研究』,『北方言語研究』，日本社会学理論学会，越中史壇会(8 件)
H27	役員・評議員等	第 65 回日本西洋史学会大会準備委員会，日本言語学会，日本ソール・ベロー協会，木簡学会，古代学協会，日本文芸研究会，富山大学国語教育学会，日本考古学協会・埋蔵文化財保護対策委員(富山県)，考古学研究会，日本地理教育学会，日本ロシア文学会，中世哲学会，内陸アジア史学会，日本中央アジア学会，International Congress of Psychology（2016）・プログラム準備委員，日本学術会議地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同地理教育分科会地図／GIS 小委員会，人文地理学会，日本アメリカ史学会・幹事会（関西），アメリカ学会，北東アジア学会，日本社会学会，日本語学会，訓点語学会(23 件)
	編集委員	日本地理教育学会，日本地理学会，続日本紀研究会，International Research in Geographical and Environmental Education，中国社会科学院文学研究所中国古代研究中心『中国古代研究』,『北方言語研究』，日本社会学理論学会，越中史壇会，日本独文学会，日本中国学会，韓国文学言語学会，韓国現代文学会(12 件)

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

資料１－１－９　年度別地域諸機関委員等就任状況

年度	名　　称
H22	清水町小学校跡地活用事業事業者選考委員会，「ふるさと文学情景作品」コンクール審査委員会，富山県弁護士会資格審査委員会，立山・黒部山岳遺跡調査指導委員会，富山県こどもフェスティバル文芸部門審査員，越中史壇会（6 件）
H23	高文祭ＰＲ事業業務委託企画コンペ選定委員会，平成 23 年度「ふるさと文学」情景作品コンクール審査委員会，高文祭広報 TV 番組制作事業業務委託企画コンペ選定委員会，高文祭観光パンフレット制作事業業務委託企画コンペ選定委員会，富山県こどもフェスティバル文芸部門審査員，富山県地域年金事業運営調整会議，立山・黒部山岳遺跡調査指導委員会，小矢部市文化財保護審査委員会，越中史壇会，富山市教育委員会・富山市文化財調査審議会(10 件)
H24	富山県こどもフェスティバル文芸部門審査員，富山県地域年金事業運営調整会議，立山・黒部山岳遺跡調査指導委員会，小矢部市文化財保護審査委員会，越中史壇会，富山市教育委員会・富山市文化財調査審議会，「安全なまちづくり・とやま賞」表彰選考委員，第 36 回全国高等学校総合文化祭審査委員長，平成 24 年度「高志の国文学」情景作品コンクール審査委員会委員長，富山市環境未来都市プロジェクトチーム委員長代行(10 件)

H25	「安全なまちづくり・とやま賞」表彰選考委員，平成 25 年度「高志の国文学」情景作品コンクール審査委員会委員長，富山県弁護士会資格審査委員会，地理空間情報の活用推進に関する北陸地方産学官連絡会議，富山県こどもフェスティバル文芸部門審査員，富山県地域年金事業運営調整会議，立山・黒部山岳遺跡調査指導委員会，小矢部市文化財保護審査委員会，越中史壇会，富山市教育委員会・富山市文化財調査審議会，富山県景観審議会，能美市教育委員会・石川県能美市史跡能美古墳群保存管理計画策定委員会，立山町文化財保護審議委員会(13 件)
H26	立山町美術館電車「立山あーとれいん」展示用小中学生絵画選定審査員，「安全なまちづくり・とやま賞」表彰選考委員，平成 26 年度「高志の国文学」情景作品コンクール審査委員会委員長，富山県弁護士会資格審査委員会，富山市男女共同参画推進審議会，高岡市男女平等推進センターネットワーク会議，富山県こどもフェスティバル文芸部門審査員，富山市文化財調査審議会，富山市郷土博物館協議会，立山・黒部山岳遺跡調査指導委員会，小矢部市文化財保護審査委員会，越中史壇会，富山市教育委員会・富山市文化財調査審議会，富山県景観審議会，能美市教育委員会・石川県能美市史跡能美古墳群保存管理計画策定委員会，立山町文化財保護審議委員会，富山県埋蔵文化財センター(17 件)
H27	富山県こどもフェスティバル文芸部門審査員，富山市文化財調査審議会，富山市郷土博物館協議会，小矢部市文化財保護審査委員会，富山県景観審議会，立山町文化財保護審議委員会，越中史壇会，富山市教育委員会・富山市文化財調査審議会，富山県埋蔵文化財センター，富山市男女共同参画推進審議会，高岡市男女平等推進センターネットワーク会議，富山県高岡市教育委員会・高岡市文化財審議会(12 件)

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

資料１－１－10　年度別その他審査員等就任状況

年 度	名　　称
H22	国際交流基金翻訳出版助成審査委員
H23	国際交流基金翻訳出版助成審査委員
H24	国際交流基金翻訳出版助成審査委員
H25	国際交流基金翻訳出版助成審査委員
H26	国際交流基金翻訳出版助成審査委員 日韓文化交流基金招聘派遣フェローシップ審査委員 文化庁「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究」技術審査専門員 文化庁「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究」技術審査専門員 人間文化研究機構共同研究プロジェクト案書面審査 人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター設置準備室員
H27	人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター設置準備室員 人間文化研究機構国立国語研究所外部運営委員 富山県日中友好協会中国語スピーチコンテスト審査員 日本言語学会学会賞選考委員会委員

（出典：データは各年度の教員業績報告に基づく）

（５）科学研究費補助金採択状況

科研の申請件数や内定件数は，第２期を通して一定の水準を維持した。第１期と比較すると，教員１人あたりの申請件数や新規採択件数は微増している。特に科研費採択内定率（新規）は，第１期年平均 19.2%，第２期年平均 26%と顕著な上昇傾向を示している（出典：データ分析集法人別経年変化データ指標 25，27，28)。また，25 年度には研究公開促進費（学術図書）も２件採択された。科研費獲得のための説明会，講演会，相談員制度，27 年度から施行を始めた不採択者に対する科研申請促進費など，科研費申請促進のための

施策により，更なる改善を目指している。

採択された研究課題は，東アジア関係が年度平均で全体の約 75%を占めており，東アジア研究の重点化の成果が見てとれる（資料１－１－11）。

資料１－１－11　科学研究費補助金採択研究課題

年度	東アジア研究	人文科学基礎研究	現代社会の諸問題への取組と社会貢献
H22	16（84.2%）	2（10.5%）	1（5.3%）
H23	17（81.0%）	3（14.3%）	1（4.7%）
H24	16（80.0%）	3（15.0%）	1（5.0%）
H25	17（70.8%）	5（20.8%）	2（8.3%）
H26	11（61.1%）	5（27.8%）	2（11.1%）
H27	12（70.6%）	4（23.5%）	1（5.9%）

（出典：人文学部総務課にて調査）

研究分担者としての採択件数は，第１期年平均 11 件から第２期年平均 19 件と増加しており，全国の研究者と継続的なネットワークを構築し，共同研究に貢献している（資料１－１－12)。

資料１－１－12　科学研究費補助金分担金一覧

年度	研究分担者数（人）	交付内定金額（千円）	１件当たりの平均交付内定金額（千円）
H22	20	6,720	336
H23	22	7,927	360
H24	22	7,874	358
H25	17	5,363	315
H26	13	3,578	275
H27	21	6,148	293

（出典：人文学部総務課にて調査）

（６）女性教員・若手教員支援

第２期の本学部の女性教員比率は，国立大学法人女性教員比率14.7%（平成26年5月1日現在現在）に比べ，平均約28%と倍近く高い（出典：データ分析集法人別経年変化データ指標10）。第２期には，女性学部長１名，女性副学部長１名が選出された（平成27年度は学部長・副学部長とも女性)。加えて，２名の男女共同参画推進室副室長（女性）も出ており，女性教員支援に対する意識が高まった。

女性教員の研究活動に対する支援策として，①全学研究サポーター制度（資料１－１－13)，②学長裁量経費女性研究者支援経費などへの応募の推奨がある。研究サポーター制度には毎年１～２名の採択があり，女性研究者支援経費には22年度に１件，26年度に１件採択された。27年度には，「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）研究チームの結成」が大型の学長裁量経費（500万円）で採択され，全学的プロジェクトとして動き出した。

また，文科省平成 27 年度科学技術人材育成補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（特色型)」の「女性研究者による国際シンポジウム企画・開催助成金」に１件採択され，国際シンポジウムを開催した。

資料１－１－13　男女共同参画推進室研究サポーター制度

研究サポーター制度
女性研究者の教育・研究活動のための環境整備の一環として，女性研究者が妊娠・出産・育児，または家族の介護を 行っている際に，研究サポーターを配置する支援を行うことにより，教育・研究活動を持続可能とすることを目指しています。また，子の養育，または家族を介護している男性研究者も支援対象者になります。

男女共同参画推進室

（出典：富山大学男女共同参画推進室ホームページより抜粋）

本学部では,第２期に競争率の高い全国公募により９名の 30 歳代若手教員を採用したが,第２期の優れた研究には,そのうち２名が選定された(「研究業績説明書」業績番号 1, 11)。若手教員の研究レベルの向上を支援するため,平成 27 年度に人文学部として長期研修制度を制定し，平成 28 年度には２名の利用が確定している（資料１－１－14)。

資料１－１－14　長期研修制度に関する要項

平成 27 年 7 月 8 日制定

富山大学人文学部教員の長期研修制度に関する要項

（趣旨）
第１条　この要項は，富山大学人文学部（以下「本学部」という。）に勤務する教員（教授，准教授及び講師をいう。以下同じ。）の長期研修制度の実施に関し必要な事項を定める。
（目的）
第２条　長期研修制度は，教員に対し，本学部における職務を免除し，本学以外の教育研究機関等において研究活動に専念する機会を与えることにより，教員の資質向上を図り，もって本学部の教育研究の発展に寄与することを目的とする。
（資格）
第３条　長期研修制度を利用することができる教員は，本学部の教員として６年以上勤務し，所属講座から推薦を受けた者とする。ただし，准教授及び講師の勤務年数は４年以上とする。
２　２回目以降の長期研修にあっては,直前の長期研修が終了した日の翌日から勤務期間を起算するものとする。
（期間）
第４条　長期研修の期間は，３月以上１年以内の継続する期間とする。
２　研修期間の始期は，原則として４月又は 10 月とする。
（職務の免除）
第５条　長期研修中の教員は，学部・大学院の教育及び管理運営に関する職務を免除する。
（研修期間中の兼業）
第６条　長期研修期間中の兼業は，認めない。ただし，特別な事由があるときは，学長の許可を得て，国立大学法人富山大学に勤務する職員の兼業に関する規則の定めるところにより，兼業に従事することができる。
（手続）
第７条　長期研修制度を利用しようとする教員は，利用年度の前年度 10 月末日までに別紙様式１により学部長に申請しなければならない。申請内容を変更する場合においても同様とする。
２　学部長は，申請者について講座代表者会議において審議し，学部・大学院の教育及び管理運営に支障がないと認めた場合は，教授会の議を経て長期研修を許可する。
３　長期研修を許可された者は,当該研修の開始にあたり,所定の手続きを行わなければならない。
４　長期研修期間中に，研修期間を短縮または中止しようとする場合には，速やかにその理由等を学部長に文書で提出しなければならない。
（研修報告）
第８条　長期研修を終了した者は，当該研修の終了後 30 日以内に，別紙様式２により研修の成果を学部長に報告するものとする。
（研究費）
第９条　長期研修期間中は，学部内研究費を配分する。
（職務免除への対応）
第 10 条　長期研修を許可された教員が研修期間中に免除された職務については，当該講座内の協力体制で補うものとする。ただし，必要に応じ，非常勤講師を措置することができる。
（以下，略）

（出典：富山大学人文学部教員の長期研修制度に関する要項）

（水準）
期待される水準にある。

（判断理由）
① 第１期に比べ，第２期の研究業績ならびに学会発表，とりわけ国際学会での発表がいずれも顕著に増加した。これらの業績は，第１期に比して，学部の研究の柱である東アジア研究に比重が置かれていることを示すものである。
② 21 年度より,学部予算に「シンポジウム等開催支援経費」を導入したことにより，東アジア関係を中心に組織的・系統的にシンポジウム等が第１期の 3.2 倍の頻度で開催されるようになったことから，東アジア研究拠点形成が着実に進んだといえる。国際シンポジウム等も毎年平均 3.2 件開催され,研究面での国際連携が強化された。
③ 学界や地域から寄せられた期待に応え，学会関連の各種役員・委員，地域諸機関における各種委員，審査員など多岐にわたる役職を務めた。
④ 科研費の獲得は，全体的に堅調な推移を示し，東アジア関連の研究が高い採択率を示した。さらに，科研費申請促進のための学部独自の相談員の設置や不採択者に対する科研申請促進費制度を導入した。
⑤ 女性や若手教員の支援策として，研究サポーター制度，学長裁量経費への応募の奨励，長期研修制度の制定などをおこなった。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

観点　研究成果の状況

（観点に係る状況）

第２期では，第１期よりもさらに明確に，（１）東アジア研究の推進，（２）人文科学の基礎研究の充実，（３）現代社会の諸問題への取り組みと社会貢献という，本学部の研究の基本方針に沿った組織的な研究活動が推進された。なかでも，「シンポジウム等開催支援経費」を設けたことにより，東アジア研究関係を中心に系統的かつ組織的なシンポジウム等の開催が活発化した。加えて，大型の学長裁量経費により，本学部の教員からなる本格的なラフカディオ･ハーン研究チームが結成され，大学所蔵のハーンの遺した書籍（ヘルン文庫）の活用と研究に対して学内外から期待が寄せられるようになっている。さらに，国際的研究の萌芽としての評価も獲得しつつある。以上のような研究活動の活発化は，第２期の研究業績・学会発表数の増加に現れている。

本学部の優れた研究としては，東アジア研究７件，人文科学の基礎研究２件，現代社会の諸問題への取り組みと社会貢献２件，計 11 件を，別紙「研究業績説明書」の通り選定した（以下のカッコ内の数字は「研究業績説明書」の業績番号)。

①東アジア研究：

選定した業績は，東アジア全体をカバーしており，分野も多岐にわたる。日本関連では，森鴎外のドイツ留学の日本近代劇に対する影響を論じた（3)（学術 S)，近畿地方・日本海沿岸域の地域方言の成立と特質を論じた（7)（学術 S）があげられる。中国関連では，清朝の宮廷演劇と民間劇の関連を考察した（4)（学術 S)，中国西北部イスラームの宗教貴族と聖者信仰について論じた（8)（学術 S）があげられる。朝鮮半島関連では，近代朝鮮文学者李光洙の欧米や日本からの影響を考察した(5)（学術 S)，ロシア関連では，北東シベリアの消滅の危機に瀕した言語コリャーク語の記述研究（6)（学術 S/社会 S）と，富山県西田美術館所蔵のイコン・コレクションの調査研究(2)（社会 S）があげられる。

②人文科学の基礎研究：

人文科学の基礎研究としては，哲学者マルク・リシールの病理論を考察した研究(1)（学術 S)，人間の視知覚と短期記憶の関係を分析した研究（11)（学術 S）の２件が選定された。これらはいずれも若手教員によるものであるが，インパクトファクターの高い国際雑誌に採択されるなど，高い研究水準を示している。

③現代社会の諸問題への取り組み：

選定した業績は，学校教育での防災や町づくりにおける地図活用を考察し，その成果を富山県の地図教育に役立てた研究（9)（社会 S）と，難病支援のあり方をナラティブ・アプローチの視点から分析し，その成果を地域の医療現場に役立てた研究(10)（社会 S）である。

④受賞等:

以上，選定した研究のうち，(3) は，日本近代文学研究に対する数少ない賞の一つである「第 20 回やまなし文学賞」を受賞した。(9) は，平成 27 年度，研究成果を生かして富山県の小中学生の地図作成技能向上に努めたことが評価され，国土地理院より感謝状を授与された。

（水準）

期待される水準にある

（判断理由）

①　「第 20 回やまなし文学賞」受賞(3)，国土地理院からの感謝状授与（9）など，外部から高い評価を受けた。

② 論文は，国内外の当該研究分野では代表的な学術雑誌に掲載された(1)(3)(4)(6)(8)(11)。
③ 書評等で高い評価を受けた (3)(6)(7)(8)。
④ 国際シンポジウムで招待講演(4)(5)(7)，国際学会で成果発表 (1)(3)(6)(8)(11)をおこなった。
⑤ 海外の著名な出版社から刊行予定の論文集への寄稿を依頼された (6)。
⑥ 地域社会に根ざした学部として，地域文化財の掘り起こしに寄与した (2)。
⑦ 研究の知見を活かして難病患者支援のアドバイザーとして地域医療に貢献した(10)。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　研究活動の状況

第１期の評価では,「改善，向上しているとはいえない」事例として,「研究活動活性化に向けた取り組み」と「科学研究費補助金の獲得に向けた取り組み」とが挙げられたが，次の点から，この２事例は改善されたといえる。

①「研究活動活性化に向けた取り組み」:

学部としての研究の基本方針を定着化させたことで，研究の方向性についての共通認識が深まり,研究の組織化に向けての取り組みが顕著に進展した。具体的には，シンポジウム等開催支援経費が設けられたことなどを背景に，東アジア研究を中心に,「人文学部東アジア研究プロジェクト」により学部の重点的課題を系統的に追求するシンポジウム等の開催が質・量ともに向上するとともに，研究業績・学会発表数も第１期よりも約 1.4 倍の増となった。

②「科学研究費補助金の獲得に向けた取り組み」:

科研費の新規採択率は，第１期年平均 19.2%，第２期年平均 26%と確実に上昇している。新規・継続を併せた採択件数比率は，第２期を通しておおよそ上昇傾向を見せている。学部独自の相談員制度や不採択者に対する科研申請促進費制度の導入といった取り組みがなされ，さらなる改善を目指している。

以上から,研究活動には一層の活性化が認められ,研究水準の向上があったと判断する。

（２）分析項目Ⅱ　研究成果の状況

①受賞等:

選定された研究のうち，(3)は,「第 20 回やまなし文学賞」を受賞した。(9)は，国土地理院より感謝状が授与された。

②国際会議での招待講演・発表等:

国際シンポジウムでの招待講演，国際学会での成果発表等による成果の海外への発信が活発化し，国際連携が強化された。

③国際的な評価:

海外の代表的な学術雑誌に掲載された他，海外の著名な出版社から執筆依頼を受けた研究もあり，国際的な評価が向上した。